

報告

母性看護学実習で新生児を抱っこした学生の体験

高浪良子¹⁾・大熊陽子¹⁾・新地裕子²⁾・後藤智子¹⁾

1) 純真学園大学 保健医療学部 看護学科, 2) 元純真学園大学 保健医療学部 看護学科

A student's experience of holding a newborn in a maternity nursing

Ryoko TAKANAMI¹⁾, Yoko OKUMA¹⁾, Yuko SHINCHI²⁾, Tomoko GOTO¹⁾

1) Department of Nursing, Faculty of Health Sciences, Junshin Gakuen University

2) Former Department of Nursing, Faculty of Health Sciences, Junshin Gakuen University

要旨：研究目的は、学生が初めて新生児を抱っこした際に生じる感情や思いを明らかにすることである。大学3年後期に母性看護学実習を行った8名の看護大学生の協力を得て、半構成的インタビューを行い、質的帰納的に分析を行った。その結果、35のサブカテゴリーと【喜びと不安が交差する緊張した場面】【命を感じ取る】【癒しを感じる】【母児への思いを巡らす】【抱っこから自分自身の過去と未来に思いを馳せる】の5つのカテゴリーが抽出された。学生が初めて新生児を抱っこする場面では、自分の技術力に懸念を抱き、上手に抱っこすることができないかもしれないという思いが先行していた。つまり学生にとって初めての新生児の抱っこは緊張する体験であり、教員は学生が新生児を抱っこする体験について、多様な受け止め方をしているということにレディネスとして知る必要がある。また新生児の抱っこを初めて体験した学生の一部は、分娩見学時の体験と同様、命の重さや神秘性まで捉えることができていると、初めて新生児を抱っこする体験は、命について考える機会となる可能性があることが示唆された。

キーワード：母性看護、看護学生、新生児、抱っこ、臨地実習

Abstract: This study aims to clarify the emotions and thoughts that arise when students hold a newborn in their arms. With the cooperation of eight nursing college students who underwent maternal nursing training in the second half of their third year of university, semi-structured interviews and qualitative and inductive analysis were conducted. Consequently, 37 subcategories and five categories were extracted: "Tense experiences where joy and anxiety intersect," "Feeling life," "Feeling healing," "Thinking about mothers and children," and "Thinking about one's own past and future from cuddles." Cuddling is a nerve-wracking experience, and teachers must understand that the experience of holding a newborn as a student can be perceived in several different ways. Additionally, the students who experienced holding a newborn were able to grasp the weight and mystery of life, as well as the experience of observing the delivery. The experience of holding a newborn was suggested to provide an opportunity similar to a labor visit.

Key words: Maternal Nursing, Nursing Students, newborn, hold, Clinical training

1. 緒言

母性看護学実習では、分娩見学を通して生命の誕生という、母性看護学実習でしか経験できない実習の場面があり、出産や育児に対する考え方など学生にとって大きな意味があると言える¹⁾。

所属する大学では、母性看護学実習の目標の1つに「生命の尊厳、母性性・父性性、母性看護の意義と役割について、個人の考えを表現できる。」とある。学生は分娩見学を行い、小さな生命の誕生を目の当たりにすることで、生命の尊厳や自分

自身が今ここに存在することの意味を十分に感じ取り²⁾、また、命の尊さや生命力の強さを感じたなど、命について考えることができる³⁾。しかし、現在は少子化の影響で分娩数が減少していることや、看護系の教育機関が増加していることで⁴⁾、実習先の確保が難しく、さらに新型コロナウイルス感染症の影響も重なり、学生が分娩見学を行うことは今まで以上に難しい現状となっている。

所属する大学の母性看護学実習では、地域周産期母子医療センター2か所で臨地実習を行ってい

る。施設の特性上、切迫早産や前置胎盤、妊娠高血圧症候群などの管理入院も多く、異常分娩のため分娩見学ができる機会は少ない。そのため、母性看護学実習の目標の一つである「生命の尊厳について個人の考えを表現できる」ことについて学生が考えられるような場面を体験しないまま母性看護学実習を終えており、昨年度の学生の学びの中に「生命の尊厳」について触れている学生は少なかった。

新生児を抱っこした学生は、初めての体験に「本当に小さくて壊れそう」「緊張する」「落としそうで怖い」と発言する一方で、「可愛い」「命の重みを感じる」「私も母になりたい」と発言する学生もあり、同じ抱っこの体験をしているにもかかわらず、個々の中で異なる体験となっている様子がうかがえる。

これまでの研究では、分娩見学を行った学生の学びや体験について命の尊さを体感し、親への感謝や自分自身も親になることを想像するなど⁵⁾ 報告されているが、分娩見学が難しい状況の中で、新生児を抱っこした学生の効果や影響、体験については研究されていない。以上のことから、母性看護学実習時に新生児を抱っこした看護学生にインタビューし、学生の体験を質的帰納的に分析することによって、新生児を初めて抱っこした際に生じる感情や思いの体験を明らかにすることを目的に研究を行う。また、母性看護学実習中に新生児の抱っこができる学生と、できない学生が混在する母性看護学実習を取り巻く多様な環境の中で、新生児を抱っこした学生の体験が明らかになることにより、分娩見学や新生児と触れ合うことが困難な状況の母性看護学実習の在り方について示唆を得たいと考える。

2. 方法

1) 研究デザイン

質的帰納的研究

2) 用語の定義

- (1) 思い：その対象についてこうだったと心を働かせること⁶⁾
- (2) 感情：喜怒哀楽や好悪など、物事に感じて起こる気持ち。(心) 精神の働きを知・情・意に分けた時の情的過程のこと⁷⁾

(3) 体験：外界との相互作用の過程を意識化し自分のものとするのが経験であり⁸⁾、それらを身をもって経験することが体験である⁹⁾。そのため、新生児を抱っこした際の思いや感情自体が学生の体験である。

(4) 新生児の抱っこ：学生が新生児を抱くのではなく、学生が椅子に深く腰掛け、教員や指導者に声をかけてもらいながら、新生児を腕の中に置いてもらう。

3) 研究協力者

研究協力者は2年次前期に母性看護学概論、2年次後期に母性看護学援助論、3年次前期に母性看護学方法論の単位を修得している。

母性看護学実習時に参加した看護大学3年次生78名のうち、母性看護学実習中に初めて受け持ち新生児を抱っこし、研究協力の同意が得られた8名の学生（以下 No.1～No.8と称す）を研究協力者とした。

4) データ収集及び分析方法

データ収集期間は2023年9月～2024年3月であった。母性看護学実習中に初めて新生児の抱っこを行った翌日から1週間以内にインタビューガイドに基づき半構成的インタビューを行った。インタビューは1人1回、約30分の予定とし、研究協力者のプライバシーの保てる個室で、個別に行った。また、面接の際には研究協力者が自分の思いをありのままに述べられるよう、研究者がその時の行動を評価（適切性、行動の特徴など）しないよう留意した。研究協力者の承諾を得てICレコーダーに録音した。インタビューガイドは以下の通りである。

- (1) 赤ちゃんを抱っこするときの環境はどのような環境でしたか？
- (2) 抱っこするときの赤ちゃんの状態はどんな状態でしたか？
- (3) その状態の赤ちゃんをみてどう思いましたか？
- (4) 赤ちゃんを抱っこする前のことについてお尋ねします
 - ・赤ちゃんに対してどのような思いや感情を抱きましたか？
 - ・赤ちゃんを抱っこする前に自分は何を考えまし

たか？

- (5) 赤ちゃんを抱っこしている最中のことについてお尋ねします
- ・赤ちゃんに対してどのような思いや感情を抱きましたか？
 - ・赤ちゃんを抱っこしている時、どのような感覚がありましたか？
 - ・赤ちゃんを抱っこしている最中に自分は何を考えましたか？
- (6) 赤ちゃんを抱っこした後のことについてお尋ねします
- ・赤ちゃんに対してどのような思いや感情を抱きましたか？
 - ・赤ちゃんを抱っこした後に自分は何を考えましたか？
- (7) 赤ちゃんを抱っこしている時に教員や指導者から何か声をかけられましたか？
- (8) 教員や指導者から声をかけられた方は、どのような声をかけられましたか？

分析方法として、インタビューの録音データから逐語録を作成し、初めて受け持ち新生児を抱っこした体験を丁寧に抽出し、学生がインタビューで話した内容の意味を損なうことがないようにコード化した。さらにデータの類似性、異質性に注目したうえで分類、集約して、共通したコードの内容の意味を損なうことが無いようにサブカテゴリー化し、最終的にカテゴリーに分類した。カテゴリー分析は、質的研究の豊富な指導教員より指導を受け、他2名の研究者間でディスカッションを行い、データ収集や分析の研究プロセスの適切性を確認した。

【 】はカテゴリー，《 》はサブカテゴリー，斜体は語りを示す。

5) 倫理的配慮

研究協力の前には、学生に研究の趣旨や方法等を文書で説明し協力を得た。研究参加は自由意志によるもので研究に参加であっても成績評価には影響しないこと、インタビュー内容についても成績評価に影響しないこと、研究の途中でであっても参加の撤回は可能であること、研究の目的以外ではデータを使用しないこと、プライバシー保護

としてデータは匿名で扱い個人名が特定されることはないことを保証した。さらに研究結果は学会などで公表するがプライバシーは保護されることを文書とともに説明し、同意を得た。

本研究は純真学園大学倫理委員会の承認を得て行った（承認番号23-05）。

3. 結果

抽出されたコード数は183，サブカテゴリー数は35，カテゴリー数は5であった（表1）。

抽出されたカテゴリーは【喜びと不安が交差する緊張した場面】【命を感じ取る】【癒しを感じる】【母児への思いを巡らす】【抱っこから自分自身の過去と未来に思いを馳せる】であった。

3.1 【喜びと不安が交差する緊張した場面】

学生は「どうやって抱っこするの？ (No6)」 「ぐずったら怖いな，落としそう (No2)」 など，自分自身の《抱っこの手技への不安》や《新生児を落としたらと心配》し，また「首が安定していないのに，怖い (No6)」 など《うまく抱っこできないことが原因で恐怖心を持つ》っており，不安や心配，怖さなどを併せ持っていた。さらに，「なにかおこっても責任がとれない (No6)」 と《責任が取れないことへの怖さ》や，「抱っこしているときに赤ちゃんの状態が悪くなるかもしれない (No3)」 と《自分が抱っこすることで状態が悪くなるかも》という不安と緊張感も併せ持っていた。

しかし「ずっと抱っこしたいと思っていたから嬉しかった (No4)」 と《希望していた新生児の抱っこを実施できて喜ぶ》学生もあり，抱っこすることの喜びと不安と緊張感を持っていた。

学生は，実際に抱っこを体験すると「赤ちゃんを抱く瞬間も，渡す瞬間も，緊張した (No5)」 と《(抱っこは) 固まるほど緊張》し，「赤ちゃんに集中してた (No4)」 と《話かけられても気付かないほど他人の赤ちゃんを抱き緊張する》状態であったが，「助産師さんが優しくかった (No5)」 ことや，「先生が近くに居てくれたこと (No2)」 もあり，《指導者や教員からのサポートに安心(する)》して抱っこすることができていた。そして無事に教員や指導者に新生児を戻すことで「腕が楽になってはーっと解放された (No5)」 と，《抱っこが終わり緊張からの解放》を感じていた。

表1 新生児を抱っこした学生の体験

カテゴリー	サブカテゴリー
【喜びと不安が交差する緊張した場面】	《抱っこの手技への不安》 《新生児を落としたらと心配》 《うまく抱っこできない事が原因で恐怖心を持つ》 《責任が取れないことへの怖さ》 《自分が抱っこすることで状態が悪くなるかもという不安と怖さ》 《希望していた新生児の抱っこを実施できて喜ぶ》 《抱っこは固まるほど緊張》 《話かけられても気付かないほど他人の赤ちゃんを抱き緊張する》 《指導者や教員からのサポートに安心する》 《抱っこが終わり緊張からの解放》 《まだ抱っこしていたい》 《赤ちゃんを返したくない気持ちもあったが母に返したい気持ちもある》 《抱っこへの恐怖心と不安を持ちながら嬉しい気持ちを持つ》
【命を感じ取る】	《新生児は小さくて温かい》 《初めて新生児に触れ実際を知る》 《無防備で弱く守らなければならない存在》 《新生児の力強さ》 《間近でみる新生児は小さくても生きている》 《抱くことで生きていることを実感》 《生きている新生児を抱き命の重みを感じる》 《ここまでの経緯を考えながら母児と接し神秘的だと感じる》
【癒しを感じる】	《小さくて可愛い》 《新生児の無意識の行動から可愛さを感じる》 《新生児の存在そのものが可愛い》 《受持ち患者の赤ちゃんは特別に可愛い》 《新生児の抱っこから癒しを感じる》
【母児への思いを巡らす】	《母親を不安にさせてなかったか心配》 《可愛いと思いながらも申し訳なさもある》 《許可してくれた褥婦と抱いた新生児への感謝の思い》 《新生児にとって抱っこは安心を得られるもの》 《自分の抱っこで安心してくれる姿が可愛くも嬉しい》 《自身の抱っこ体験と褥婦の育児行動時の思いを重ねる》
【抱っこから自分自身の過去と未来に思いを馳せる】	《両親への感謝の思い》 《自分の将来像を抱き子育てへの責任感が重いことを感じる》 《抱っこは将来のための経験値》

一方で、抱っこしている最中は、「もうちょっと抱っこしていたかったな (No4)」と《まだ抱っこしていたい》という思いと、抱っこを終わる際には、「寂しくなりました。でももうこれ以上は怖くて返したい (No5)」と、《赤ちゃんを返したくない気持ちもあったが母に返したい気持ちもある》り、「初めてだから怖いけど、楽しみでもあり、やっと抱っこできた (No4)」と、《抱っこ

の恐怖心と不安を持ちながらも嬉しい気持ちを持つ》という両方の思いを体験していた。

3.2 【命を感じ取る】

学生は母性看護学方法論で新生児人形を用いた抱っこの練習を行って実習に臨んでいる。実際に初めて新生児を抱っこすることで、「湯たんぽを抱いているような感じ (No7)」「本当に小さい (No1)」と、《新生児は小さくて温かい》存在であ

ると気づいていた。そして「触れてみたらやっぱり動いて人形とは違う (No8)」と、《初めて新生児に触れ実際を知 (る)》り、「赤ちゃんは守らないといけない (No5)」「柔らかくて壊れてしまいそう (No1)」など、《無防備で弱く守らなければならない存在》として、認識していた。

一方で新生児の動きを感じ取ることで「小さいのに力強く動いている (No1)」「こんなに小さいのに生きているんだ (No6)」と、《新生児の力強さ》《間近でみる新生児は小さくても生きている》ことを感じており、学生は抱っこの体験から、新生児の力強さ、そして生命力を感じ取っていた。

さらに学生は「ちっちゃいけどあったかくて、生きてるな (No4)」「命がけで出てきたので命の重み (No3)」があると《抱くことで生きていることを実感》し、《生きている新生児を抱き命の重みを感じ (る)》取っていた。そして母親のおなかの中にいたことを不思議に思いながら、一生懸命に生まれてきたことや、笑顔で新生児に話しかける母親の姿をみて「一生懸命呼吸したり、指をくわえたり、モデル人形でやるときとは違って神秘的 (No2)」「ずっと笑顔で語りかけており、感動というか、神秘的だな (No1)」と発言し、《ここまでの経緯を考えながら母児と接し神秘的だと感じ (る)》取っていた。

3.3 【癒しを感じる】

学生は「小児で受け持った1歳児より小さい (No8)」と、小児看護学実習で受け持った1歳の幼児と比較し、抱っこした際に手や爪をみて《小さくて可愛い》と感じ取っている。そして、抱きながら新生児を観察しており、「ジーっと見つめてきて可愛い (No8)」「首や手を動かしたり可愛い (No4)」と、《新生児の無意識の行動から可愛さを感じ (る)》ており、「存在が可愛い (No5)」と、《新生児の存在そのものが可愛い》と感じていた。特に、実習で受け持った新生児を抱っこすることで、「受け持ちの赤ちゃんだから余計にかわいくみえた (No3)」と《受け持ち患者の赤ちゃんは特別に可愛い》と感じており、「実習最終日で疲れもあって癒しみたい (No2)」と《新生児の抱っこから癒しを感じ (る)》ていた。

3.4 【母児への思いを巡らす】

学生は自分自身が新生児を抱っこすることで、

母親が「緊張している学生に抱っこさせて大丈夫かなって気持ちもあったんじゃないかな (No7)」と《母親を不安にさせてなかったか心配》し、「泣き始めてしまったけど、でも可愛いな (No2)」と、なれない抱っこや寝ている新生児を起こしてしまうことに、《可愛いと思いながらも申し訳なさ (もある)》を併せ持っていた。そして、「お母さんと赤ちゃんにありがとう (No8)」と、未熟な看護学生である自分たちに《許可してくれた褥婦と抱いた新生児への感謝の思い》を抱いていた。また、「泣いていたのに泣き止んだ。やっぱり抱っこは赤ちゃんにとって心地よいのかな？安心感が感じられるんだ (No4)」と、抱っこされ寝ている新生児をみて、《新生児にとって抱っこは安心を得られるもの》と捉え、「私の腕の中で安心できてるんだなって感動です (No6)」と、《自分の抱っこで安心してくれる姿が可愛くも嬉しい》という気持ちになっていた。

学生は抱っこの時に新生児が泣いてしまって申し訳ない気持ちやどうしたらいいのだろうという気持ちが、「お母さんが授乳がうまくいなくて自分を責めるのと同じ感じ (No4)」と、発言しており《自身の抱っこの体験と褥婦の育児行動時の思いを重ね (る)》ていた。

3.5 【抱っこから自分自身の過去と未来に思いを馳せる】

学生は「自分もこんな感じで迷惑をかけたんだろうな (No4)」と、小さい時から優しかった《両親への感謝の思い》を持っていた。そして「この命の重みを自分で責任もって育てないといけないんだ。責任が重く感じた (No8)」と将来いつか自分自身が妊娠出産する立場となることを想像しながら、《自分の将来像を抱き子育てへの責任感が重いことを感じ (る)》取っていた。

また、「経験にはなるし、教えることもあるので、経験は必要かなという気持ちもある (No7)」と、いつか自分自身が看護師となり、抱っこすることを指導する立場となることを想像し、《抱っこは将来のための経験値》と捉える学生もいた。

4. 考察

4.1 喜びと不安が交差する緊張した場面

学生は初めて新生児を抱っこする場面において、《抱っこの手技への不安》《新生児を落としたら心配》と、自分の技術力について懸念を抱いており、《うまく抱っこできないことが原因で恐怖心を持つ》ち、《責任が取れないことへの怖さ》が先行していた。臨地実習における学生の困難感に関する研究では、臨地実習の中で、学生にとって困難感が最も高い因子は看護援助の実施であり、自分の看護技術の未熟さから困難感を抱く¹⁰⁾と述べられていた。今回の結果でも、十分な知識・技術を持ち併せていない、未熟な自分たちが新生児を抱っこすることにより、《自分が抱っこすることで状態が悪くなるかもという不安と怖さ》、未知の状況に対する強い緊張感を持ちその場にいた様子が推察された。

一方で、《希望していた新生児の抱っこを実施できて喜ぶ》学生や、《話しかけられても気付かないほど他人の赤ちゃんを抱き緊張する》学生、《抱っこは固まるほど（緊張）》強い緊張感を感じながらもいざ抱っこするとしっかりと新生児に向き合い、このまま抱っこし続けたいという学生もいた。小島は、母親は児の体の小ささや呼吸、温もり、重みなど児が意図していないものもサインとしてうけとり、安堵感や前向きな気持ちを感じる¹¹⁾と述べている。学生も、《指導者や教員からのサポートに安心（する）》しながら、新生児を直に感じることで緊張感が軽減され、《抱っこが終わり緊張からの解放》を感じながらも《まだ抱っこしていたい》《赤ちゃんを返したくない気持ちもあったが母に返したい気持ちもある》《抱っこへの恐怖心と不安を持ちながら嬉しい気持ちを持つ》という前向きな気持ちも持つ体験となったことが考えられる。

4.2 新生児から感じ取る癒しと生命

学生は新生児の抱っこの体験中に、《小さくて温か（い）》く、新生児の動き、命の重みそして神秘性を感じ取っており、《初めて新生児に触れ実際を知（る）》った。本田らは、母親は早産児を抱き、その時の呼吸から連動する体動で、子どもの強さや生命力を感じ取る¹²⁾と述べている。学生も新生児の小さいながらも一生懸命に生き

ようとしている息遣いや温もりを感じ取ること、《間近でみる新生児は小さくても生きている》と感じており、《新生児の力強さ》や《無防備で弱く守らなければならない存在》であると、《抱くことで生きていることを実感》《生きている新生児を抱き命の重みを感じ（る）》ていた。そして【命を感じ取（る）】ったのではないかと考えられる。

さらに新生児が命がけで生まれてきたことを想像し、母親も同様に苦しかったはずなのに、笑顔で話しかける様子を見て、《ここまでの経緯を考えながら母児と接し神秘的だと感じ（る）》取っていた。

学生は緊張しながらも新生児をみることで《小さくて可愛い》《新生児の無意識の行動から可愛さを感じる》《新生児の存在そのものが可愛い》と感じ取っていた。また、《受持ち患者の赤ちゃんは特別に可愛い》と《新生児の抱っこから癒しを感じ（る）》ていた。樋口らは、看護者は、看護ケアを行う中で、温かく柔らかな感触をもったケア対象者を直接自分の皮膚で感じながら、お互いが心地よさを感じられた時、「癒された」と表現する¹³⁾と述べている。抱っこを体験した学生たちも、新生児を可愛いと感じながらぬくもりとやわらかさに触れ、【癒しを感じ（る）】ていたのではないかと推察する。

4.3 母児への思いを巡らす

学生は技術が未熟な自分たちが、新生児を抱っこすることで、《母親を不安にさせてなかったか心配》していた。黒田らによると、学生は臨地実習で、他者注視的な思考に則って、相手の立場に立ち考えている¹⁴⁾とされている。学生は、未熟な技術で相手を不安にさせる可能性があることを考えながら、自分たちの体験のために抱っこをするということに、《可愛いと思いながらも申し訳（なさもある）》ない気持ちを抱き、《許可してくれた褥婦と抱いた新生児への感謝の思い》を持っていたことが推察される。

一方で抱っこを体験した際に、新生児が泣き止む行動や、眠りにつく様子から《新生児にとって抱っこは安心を得られるもの》と体感し、《自分の抱っこで安心してくれる姿が可愛くも嬉しい》と自分が抱っこをすることで安心して眠りについ

ている様子をみて自分も役に立てたという喜びを感じており、否定的感情と肯定的感情の両方の思いを併せ持っていた。

学生は自身の抱っこの体験を通して、褥婦が育児行動において学生と類似した思いを持っているのではないかと《自身の抱っこ体験と褥婦の育児行動時の思いを重ねる》発言をしていた。小谷は、大学生と乳幼児が関わった際、乳幼児が急に泣き出したり、予想外の行動をとることで自分自身が傷つけてしまうことから、乳幼児に対し怖いという感情を持つ学生がいると述べている¹⁵⁾。今回の学生たちも、新生児が泣いてしまうことに申し訳なさや、どうしたらいいのだろうという否定的な感情を抱いており、出産をしたばかりの母親も初めての体験で戸惑うことが多く、同じ気持ちを持つのではないかと、【母児への思いを巡ら（す）】せていた。

4.4 抱っこから自分自身へ思いを馳せる

学生は、緊張しながら抱っこをすることで、《抱っこは将来のための経験値》《両親に対する感謝の思い》を抱いていた。緊張しながら抱っこを体験した際、自分自身をうまれたばかりの新生児と重ね、新生児を育てることの大変さを想像できたからであると考え、さらに、学生は自分自身が将来妊娠出産を体験し、この命の重みを育てること、責任感についても考えており、《自分の将来像を抱き子育てへの責任感が重いことを感じる》と、自らの感情が動く体験となっていた。先行研究では、青年期は発達段階として親性を獲得するための重要な準備時期である¹⁶⁾と述べられている。その時期に新生児を抱っこすることは、将来、自分自身が親へとなるための肯定的な感情を育む一助となったのではないかと推察できる。

4.5 学生の抱っこの体験から得られた教育的示唆

抱っこの体験は、学生個々により、緊張感や不安感など否定的な感情と肯定的な感情が入り乱れている様子があった。特に、抱っこの体験中に教員や指導者から声をかけられたことさえ気づいていない学生も存在し、想像以上に強い緊張感のなかで抱っこの体験をしたことが推察できる。

学生によっては、抱っこの体験は強い緊張感を伴うものであるため、抱っこの体験をできることなら避けたい学生も一定数いることが考えられる。

各学生の気持ちに耳を傾けながら、学生が強い緊張感をもったまま抱っこの体験を勧めていくことが無いよう、教員側は考慮する必要がある。

学生は、初めての新生児の抱っこの体験を通して、ぬくもりや、小ささ、新生児の産まれてきた経緯を想像し、生命力の強さや新生児の強さや脆弱性、そして命の重みを感じ取っていた。先行研究では、分娩見学を行うことによって、学生たちが、新しい生命の誕生に感動し、命の尊さ、神秘さを捉える¹⁷⁾ことや、分娩見学の意義として新しい命の誕生への感動体験や、実習後の母性看護学への興味^{18,19)}について述べられているが、今回の抱っこの体験では、そのような体験をする機会とはならなかった。しかし、分娩見学時と同様に、「命の重み」や「神秘性」について、学生が発言しており、母性看護学実習を履修する学生全員に「命」について考えてもらうためには、新生児の抱っこの体験を行うことでも、命について考える機会となる可能性がある。

5. 結語

新生児を初めて抱っこした学生達の体験では、【喜びと不安が交差する緊張した場面】【命を感じ取る】【癒しを感じる】【母児への思いを巡らす】【抱っこから自分自身の過去と未来に思いを馳せる】の5つのカテゴリーが抽出された。

学生にとって新生児を抱っこすることは、「命の重み」や「神秘性」について考える機会となっていた一方で、未熟な自分たちの体験のために新生児を抱っこすることで、母親を不安にさせ、申し訳なさを感じることや、新生児が落ち着いたことで喜びを感じるなど、否定的感情と肯定的感情の両方を併せ持っていた。そして、自身の抱っこの体験と、褥婦の育児行動を対比させ、同様の思いを持っているのではないかと感じていた。

学生によっては、新生児を育てることの大変さを想像し、両親への感謝の思いを述べ、また、自分自身が子どもを育てるという責任感についても述べていた。

教員は、学生が初めて新生児を抱っこする体験に際して、様々な受け止め方をしていることを、レディネスとして捉えておくことが必要である。学生全員が肯定的な捉え方をするとは限らず、緊

張が強く否定的な感情を抱く学生もいることを知っておく必要がある。そして抱っこ体験では、分娩見学時と同様に、「命の重み」や「神秘性」について感じ取ることができていたことより、母性看護学実習をする学生が「命」について考える機会として、新生児の抱っこの体験が重要な意味を持つ可能性のあることが示唆された。

6. 研究の限界

本研究の限界として、研究協力者が8名と少数であったこと、実習施設が地域周産期母子医療センターに限られていたことより、今後は研究協力者数や対象施設も拡大しながら研究精度を上げていく必要がある。

謝辞

本研究に協力いただいた学生の皆様に心より感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 奥山幸子. 看護基礎教育における領域別臨地実習に関する倫理教育の現状と課題—2010年～2020年に発表された文献検討—. 大和大学 研究紀要. 2022, 8, P.31-43.
- 2) 志賀くに子, 伊藤榮子. 母性看護学実習における学習効果の検討—分娩見学レポートの分析—. 日本赤十字秋田短期大学紀要. 2000, 5, P.79-87.
- 3) 露木貴子, 小室晴美. 母性看護学実習の分娩見学における学生の学びの分析. 神奈川県立平塚看護専門学校紀要. 2012, 16, P.17-20.
- 4) 齊藤しのぶ. 看護学士課程における教育の現状と課題. 日本薬理学会誌. 2018, 151, P.186-190.
- 5) 西川明美, 島田壽美子, 堀越摂子. 分娩見学実習を通して感じたこと・考えたこと—看護大学生の分娩見学レポートより—. 群馬医療福祉大学紀要. 2016, 5, P.61-67.
- 6) 新村出. 広辞苑. 第5版, 岩波書店, 1998, P.400.
- 7) 新村出. 広辞苑. 第5版, 岩波書店, 1998, P.602.
- 8) 新村出. 広辞苑. 第5版, 岩波書店, 1998, P.815.
- 9) 新村出. 広辞苑. 第5版, 岩波書店, 1998, P.1597.
- 10) 中本明世, 伊藤朗子, 山本純子, 他. 臨地実習における学生の困難感の特徴と実習状況による困難感の比較—基礎看護学実習と成人看護学実習の比較を通して—. 千里金蘭大学紀要. 2015, 12, P.123-134.
- 11) 小島賢子. 母子関係にする文献レビュー—身体接触が及ぼす効果. 大阪総合保育大学紀要. 2017, 11, P.131-140.
- 12) 本田直子, 杉本陽子, 村端真由美. 早産時を持つ母親がわが子を抱いている時の思いと抱くことの意味. 日本小児看護学会誌. 2015, 124 (2), P.44-50.
- 13) 樋口佳栄. ケアにおける癒しの特徴—看護師/助産師が実践の場で癒された体験からの考察. 日本赤十字看護大学紀要. 2009, 23, P.9-17.
- 14) 黒田由香理, 水戸優子. 看護学生が基礎看護学実習において患者との関わりのなかで「相手の立場に立って考えた」体験 A 大学における分析. 神奈川県立保健福祉大学誌. 2024, 21 (1), P.3-15.
- 15) 小谷博子. 乳児とのふれあい体験が大学生へもたらす意識の変化. 東京未来大学研究紀要. 2024, 18, P.73-83.
- 16) 佐々木綾子, 末原紀美代, 町浦美智子, 他. 青年期の親性を育てる「乳幼児とのふれあい育児体験」の男女差に関する研究—心理・生理・内分泌学的指標による検討—. 福井大学医学部研究雑誌. 2007, 8 (1.2), P.17-29.
- 17) 上掲5) の P.61-67.
- 18) 本多洋子. 分娩見学の学びの分析. 桐生短期大学紀要. 2006, 17, P.209-214.
- 19) 野田貴代, 都竹友季子, 出口睦雄. 母性看護学実習における分娩見学の意義. 愛知きわみ 短期大学紀要. 2015, 11, P.13-22.